

教員養成における領域「表現」の音楽側面の検討 (1)

— 幼稚園及び小学校の教師の意識比較 —

奥村 正子*・山根 直人**・志村 洋子***

キーワード：教員養成、領域「表現」、音楽、保育者、教師

1. はじめに

現代の子どもは、日常生活のあらゆる場面で多種多様な音楽に取り巻かれた、豊かな音楽環境に生きている。しかし一方、幼稚園・保育所の保育室や教室で展開される音楽活動をみると、保育者や教師がピアノを弾き、それに合わせて子どもが一斉に歌ったり、幼児・児童用楽器を分担して弾くというスタイルが一般的なものとして定着している現状がある。

例えば子どもが歌う活動は、既成曲をただ教師の鍵盤楽器にあわせて声を出して再生するだけのものではない。子どもはさまざまなイメージを自らの声にのせて表現しており、子ども自身の音楽的「表現」は本来、自由にいきいきと展開して行くものでなければならない。

そこで、本研究は子ども自身の音楽的「表現」に目を向け、子どもの表現を基盤とした保育や授業を行うためには、教員養成の場に何が求められるのか、また、小川ら(2002)が指摘する保育者や教師の「知性」とも言える音楽的専門性はいったいどのようなものかについても具体的に検討し、養成の中で学習することが求められる要素について明らかにすることを目的とす

る。

2. 幼稚園教育要領「表現」が求めるものと養成の実際

幼稚園教育要領「表現」を音楽的側面に焦点を当てて詳細に読み取ると、そこには子どもの心身の発達を考慮し、子ども自身の表現の内容や手段を汲み取り、意味づけていくことの必要性を理解することができる。しかし、現実には保育現場ばかりでなく保育者・教員養成において、それらの意味・意義が実践へと繋がっているとは言い難い。

これまでこの領域「表現」については、表現を指導する養成機関の教員が十分に役割を果たしているとは言えず、また保育の現場では、表現の「ねらい」を具体的な「内容」として幼児の活動に導く力に欠けていると言っても過言ではない現状があった。井戸(2003)が「保育現場で表現を指導して、幼児の総合的な能力としての表現力を伸ばさせることができるのだろうか」と疑問を呈しているように、保育者・教師の表現の捉え方には混乱、あるいは偏った考え方があるように見受けられる。つまり、養成する立場の我々が学生に何を学習させ、何を指導するかの具体像を明らかにできておらず、これはまた現在の領域「表現」の包含する混乱を示していると考えられる。

* 埼玉大学教育学部非常勤講師

** 理化学研究所・東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所

*** 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

さて、ここで領域「表現」の音楽的側面に視点を当てて考えてみよう。子ども自ら表出する音楽的な表現そのものに目を向け、その表現を基盤とした保育や教育活動を行うためには、保育者や教師にいったいどのような音楽的「知性」(小川・林、2002)が必要なのであろうか。

歌うことを例にとってみると、子どもは保育者や教師、そして友だちの歌声などに触発され、声を合わせて表現することを楽しみ、活動を展開させていく。こうした保育室での歌唱活動の姿は、歌うことが持つ本来の「楽しみを味わう姿」と言ってよいだろう。この場合、子どもの率直な音楽表現に目を向ける力、子どもが歌うその曲が持つ味わいに気づき、さらに音楽的楽しみや味わいがどこにあるのか、また音楽的な配慮をどのように構成すれば、その子どもの音楽的な育ちを援助できるのかについて、具体的かつ的確に理解し行動に移せることが望まれる。しかも、その理解と行動の基盤となるものは、保育者や教師の音楽に対する基礎的な理解と知識に裏打ちされていなければならないのである。

教員養成の場では、ともすると歌やピアノの演奏が上手な学生は、「自分は表現の指導は上手くできる」と考えがちである。一方、楽譜を読むことさえままならないまま入学してきた学生は、苦手意識を克服するのに多くの時間を費やすことになる。これまでの教員養成機関での音楽教育が、楽曲の演奏を最大の関心事にしていることがその要因のひとつと思われる。

では、子どもとともに育ち、音楽を自ら楽しむことができる教員を養成するためには、どのような授業が用意されていることが望まれるのだろうか。また、最も必要なものは何だろうか。本稿ではこれらのことを明らかにするため、現在幼稚園の教師として幼児の教育に携わる者を対象に、音楽に関連した援助や活動を行うために必要と考える音楽的スキル、能力や知識は何か、また養成の中で学習することが求められる要素は何かを問うアンケートを作成し、実施した。また、これらの結果と対比するものとして、小

学校教師を対象に同様のアンケートを実施したので報告する。

3. 幼稚園教師及び小学校教師へのアンケート調査

3-1 目的

教師が、領域「表現」及び音楽科の指導において、必要と感じる音楽に関わる技能や知識について、アンケート調査を通して明らかにする。これにより、教員養成において、領域「表現」の音楽側面にかかわる学習に必要な要素を明確化する。

3-2 方法

<調査の対象>

調査の対象としたのは埼玉県及び東京都の公立及び私立幼稚園に在職する教員、計134名、埼玉県内の公立小学校に在職し「音楽専科」の担当ではない教員、計77名、合計211名であった。

<手続き>

質問紙は各々の園及び研修会などの会場において、調査の目的について筆者らが説明を行い、質問紙を配布して回答してもらった。また小学校の教師についても、研修会の会場で筆者らが説明を行い、質問紙を配布して回答してもらった。なお、調査期間は2005年12月から2006年8月であった。

<調査項目>

質問紙の調査項目は以下の①～⑦の通りである。

- ① 回答者の音楽学習経験について、養成校等での授業以外の経験を具体的に尋ねた。
- ② 子どもの音楽表現にかかわる活動の指導や援助を行う際に、現在の保育者・教師にとって必要と考えられる技能や能力、知識について、図1に示した24項目の選択肢を作成し、5段階で回答してもらった。^{註1)}
- ③ 幼稚園や小学校に就職する以前に、養成の段階で身につけておいて欲しいと考える音

回答項目

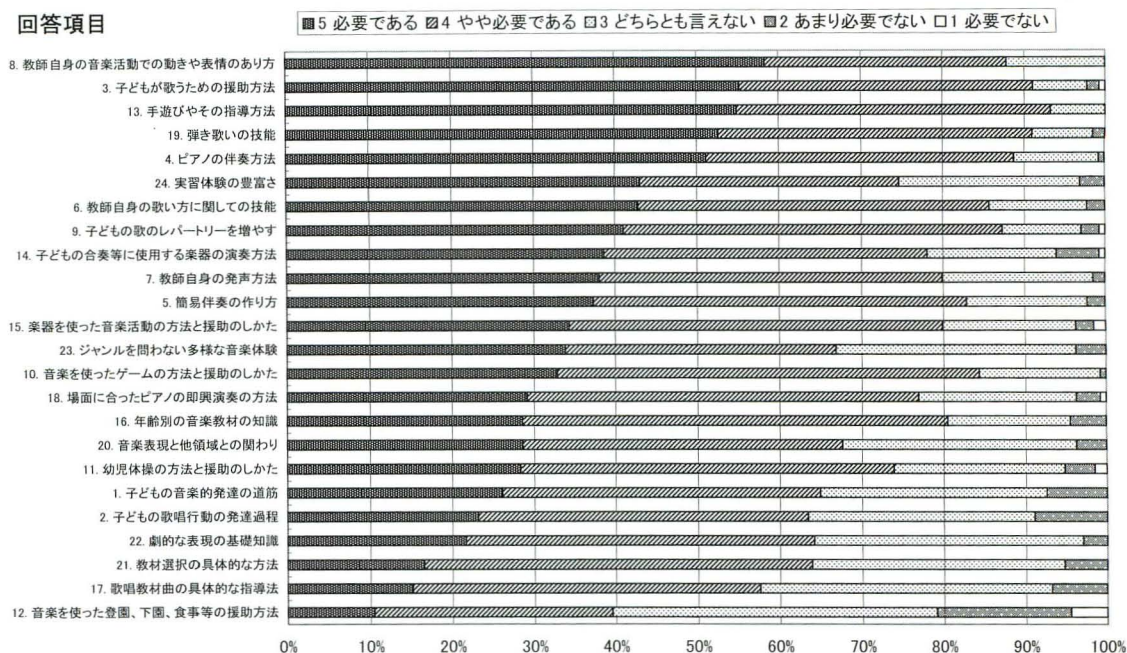


図1 質問項目②の回答（幼稚園）

楽的技能や能力や知識について、②と同様に回答してもらった。^{註2)}

- ④ 保育者・教師として音楽的な活動について学んでおくべきだったと考える内容について、「発声法」「表現者としての保育者論」「身体表現」など8項目の選択肢を作成し、回答を求めた。
- ⑤ 保育や授業を行う中で、子どもの音楽的な表現活動について問題と感じていることについて、「メロディーがうまく歌えない子どもへの指導方法」「行事に向けての音楽の練習」「鼓笛隊や合奏の指導について」「教材曲の選択の仕方」の4つの選択肢の中から回答してもらった。
- ⑥ 実際の子どもの音楽的な表現にかかわる活動で、印象に残っていることについて自由に記述してもらった。
- ⑦ 保育者・教師自身が子どもと関わる際に、実際にどのような歌声（発声）を目指しているか、そのモデルとなるものを探るため、望ま

しい歌声の持ち主を歌手の実名をあげて選んでもらった。選択肢として用意したのは茂森あゆみ、森山良子、浜崎あゆみ、平原綾香、吉田美和などメディアで接することが多い歌手である。

3-3 結果と考察

本稿では調査項目の②、③、⑤及び⑦を中心に、得られた結果について報告する。

<幼稚園・小学校教師として現在必要と考えられる音楽に関する技能・知識など>

図1に幼稚園の結果を示した。調査項目②の24項目の選択肢の中で「必要」とした回答が最も多かったものは、「8. 教師自身の音楽活動での動きや表情のあり方」(58%)で、次いで「3. 子どもが歌うための援助方法」(55%)、「13. 手遊びやその指導法」(55%)、さらに「19. 弾き歌いの技能」(53%)、「4. ピアノの伴奏方法」(51%)という順であった。次に、「やや必要」とした回答が多かった項目は、「16. 年齢別の音楽教材の知識」(52%)、「10. 音楽を使ったゲー

回答項目

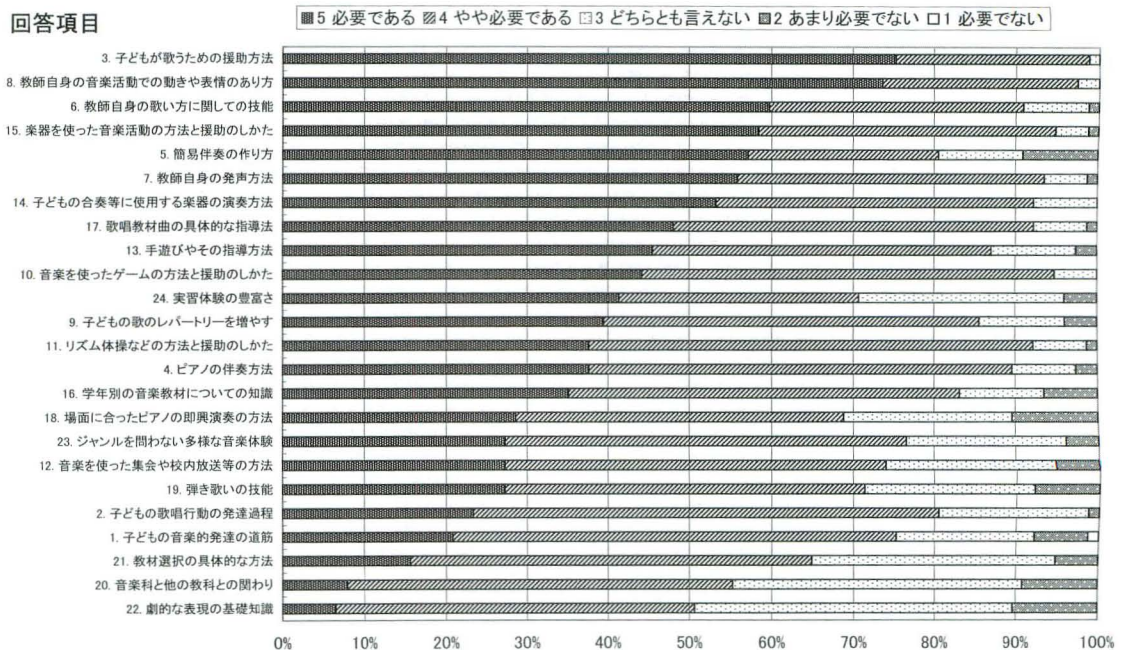


図2 質問項目②の回答〈小学校〉

ムの方法と援助のしかた」(51%)、次いで「18. 場面に合ったピアノの即興演奏の方法」(48%)、「21. 教材選択の具体的な方法」(47%)、「9. 子どもの歌のレパートリーを増やす」(46%)という結果となった。さらにこれらの結果、すなわち「必要」と「やや必要」とした回答を合わせてみると、「13. 手遊びやその指導方法」(93%)、次いで「3. 子どもが歌うための援助方法」(91%)、「19. 弾き歌いの技能」(91%)、「4. ピアノの伴奏方法」(89%)、「8. 教師の音楽活動での動き、表情のあり方」(88%)となった。一方、「必要でない」、「あまり必要でない」と回答された項目をあわせてみると、「12. 音楽を使う登下園・食事の援助方法」(21%)が突出して多い結果となった。その他は「2. 子どもの歌唱行動の発達過程」(9%)、「17. 歌唱教材曲の具体的な指導法」(7%)、「1. 子どもの音楽的発達の道筋」(7%)、「14. 子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法」(6%)、「21. 教材選択の具体的な方法」(5%)であった。

これらのことから幼稚園の教師が現在必要と考えているものは、「自らの音楽的技能」が中心で、また「子どもへの具体的な指導」に関しても必要ととらえられている。しかし、音楽を使った日常生活の活動や「子どもの発達にかかわる知識」などは必要ではないと考えている傾向が示された。

次に小学校教師の結果を見ると、図2に示したように、「必要」とした回答が最も多かったものは「3. 子どもが歌うための援助方法」(75%)で、次いで、「8. 教師の音楽活動での動き、表情のあり方」(74%)、「6. 教師の歌い方の技能」(60%)、「15. 楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた」(58%)、「5. 簡易伴奏の作り方」(57%)という結果であった。次に、「やや必要」とした回答が多かった項目は、「2. 子どもの歌唱行動の発達過程」(57%)、ついで、「1. 子どもの音楽的発達の道筋」(55%)、「11. 幼児体操などの方法と援助のしかた」(55%)、「4. ピアノの伴奏方法」(52%)、「10. 音楽を使った

ゲームの方法と援助のしかた」(51%)、「23. ジャンルを問わない多様な音楽体験」(49%)、「21. 教材選択の具体的な方法」(49%)であった。さらにこれらの結果、すなわち「必要」と「やや必要」とした回答を合わせてみると、「3. 子どもが歌うための援助方法」(99%)がもっとも多く、次いで「8. 教師の音楽活動での動き、表情のあり方」(97%)、「15. 楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた」(95%)、「10. 音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた」(95%)、「7. 教師の発声方法」(94%)があげられた。一方、「必要でない」、「あまり必要でない」と回答された項目をあわせてみると、「22. 劇的表現の基礎知識」(10%)、「18. 場面に合ったピアノの即興演奏の方法」(10%)、「20. 音楽科と他の教科との関わり」(9%)、「5. 簡易伴奏の作り方」(9%)、「1. 子どもの音楽的発達の道筋」(8%)、「19. 弾き歌いの技能」(8%)となり、突出して多いものはみられなかった。

このように、小学校教師が現在必要と考えているものは、「自らの音楽的スキル」ばかりでなく、子どもへの指導の中で必要となる「知識」と、歌や楽器の「具体的な指導方法」であり、一方、あまり必要ではない考えるものは「劇」や即興演奏の技能、学年別教材や他教科との関連などの知識についてなどである傾向が示された。

これらの幼稚園教師と小学校教師の結果を比べてみると、幼稚園教師と小学校教師が共通して「必要」とした回答は、「教師の音楽活動での動き、表情について」(58%) (75%)、と「子どもが歌うための援助方法」(55%) (74%)で、また「必要」「やや必要」をあわせた回答でも同様に、「教師の音楽活動での動き、表情について」と「子どもが歌うための援助方法」であった。このことは、歌ったり楽器を演奏したりする中で子どもへの指導方法とともに、教師自身がその音楽や教材にどのように自らの「表現」を載せていくか、また、それらの教師の想いをどのように伝えていくかの手法に、必要とするものが内在していることを示すものと考え

る。

しかし、詳細にその傾向を見ると、まず幼稚園教師では「弾き歌いの技能」、「ピアノの伴奏法」、「場面に合ったピアノの即興演奏の方法」など、教師自身のピアノに関連した技能を必要とする回答が多かった。このことは、幼稚園では子どもの音楽活動を援助する場面において、教師のピアノ演奏が担っている役割が大きいことを示す。また、「音楽を使う登下園・食事の援助方法」、「子どもの歌唱行動の発達過程」、「教材曲の具体的な指導法」、「子どもの音楽的発達の道筋」、「子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法」などを必要とする回答が少なかったことは、子どもの発達過程についての知識や、教材や楽器についての具体的な指導法については、それほど必要に迫られていないことを示唆している。一方、小学校教師では、楽器を使う活動や音楽を使ったゲーム、リズム体操など、音楽活動の具体的な方法や援助の方法についての必要性が高く、ピアノなどの演奏が必要ではないものについてはそれほど高くなかった。この傾向は他の教科との関わりだけでなく、「場面に合ったピアノの即興演奏の方法」、「弾き歌いの技能」を必要としないという回答が多かったことから、教師がピアノで子どもの音楽活動を支える場面が少ないことが示唆され、幼稚園教師とやや異なる傾向が見られた。

<幼稚園・小学校教師が養成の段階で身に付けておくべき音楽に関する技能・知識など>

図3に幼稚園教師の結果を示した。質問項目③の中で「必要」とした回答が最も多かったものは、「13. 手遊びやその指導法」(59%)、「8. 教師の音楽活動での動き、表情のあり方」(51%)で、次いで「19. 弾き歌いの技能」(48%)、「4. ピアノの伴奏方法」(47%)であった。次に「やや必要」とした回答が多かった項目は、「10. 音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた」(55%)、「11. 幼児体操の方法と援助のしかた」(51%)、「14. 子どもの合奏などに使用する楽器の演奏の方法」(47%)、「15. 楽器を使った音楽活動の

回答項目

■5 必要である □4 やや必要である □3 どちらとも言えない □2 あまり必要でない □1 必要でない

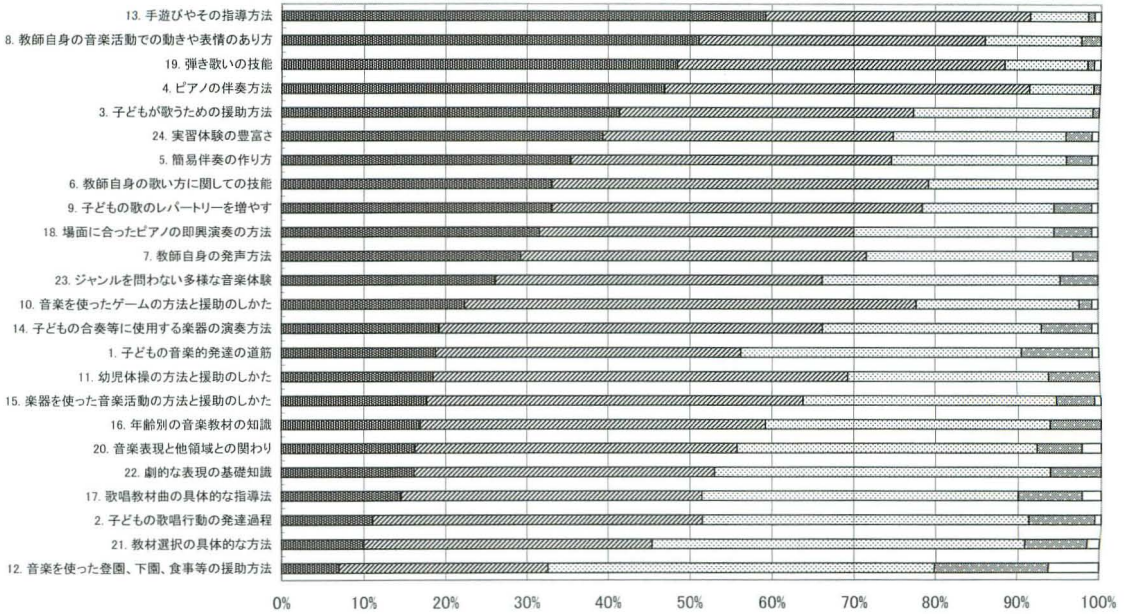


図3 質問項目③の回答〈幼稚園〉

方法と援助のしかた」(46%)、「6. 教師自身の歌い方に関しての技能」(46%)、という結果となった。これらの結果を合わせてみると、「13. 手遊びやその指導方法 (92%)」、及び「4. ピアノの伴奏方法」(92%)で、次いで「19. 弾き歌いの技能」(88%)、「8. 教師自身の音楽活動での動き、表情のあり方」(86%)となった。一方、「必要でない」、「あまり必要でない」としたものが多かった項目は、「12. 音楽を使う登下園・食事の援助方法」(20%)が突出し、次いで「17. 歌唱教材曲の具体的な指導法」(10%)、「21. 教材選択の具体的な方法」(9%)、「1. 子どもの音楽的発達の道筋」(9%)、「2. 子どもの歌唱行動の発達過程」(8%)であった。

これらのことから、幼稚園教師が養成において学習すべきと考えているものは、「教師の音楽的技能」であり、また「子どもへの援助の方法」で、現在の教師が必要と考えるものとほぼ同様の傾向が読み取れる結果であった。しかし、子どもの発達にかかわる「知識」や音楽を使っ

た日常生活の活動の援助方法については必ずしも必要ではないと考えている傾向が示された。

次に小学校教員の結果を図4に示した。まず、「必要」とした回答が最も多かったものは、「3. 子どもが歌うための援助方法」(63%)で、次いで「8. 教師自身の音楽活動での動き、表情のあり方」(56%)、「7. 教師自身の発声方法」(49%)と「6. 教師自身の歌い方の技能」(47%)、「15. 楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた」(47%)であった。また、「やや必要」とした回答が多かった項目は、「4. ピアノの伴奏方法」(52%)、「14. 子どもの合奏などに使用する楽器の演奏方法」(51%)、「13. 手遊びやその指導方法」(48%)、「1. 子どもの音楽的発達の道筋」(47%)であった。これらの結果を合わせると、「8. 教師自身の音楽活動での動き、表情のあり方」(95%)がもっとも多く、次いで、「14. 子どもの合奏などに使用する楽器の演奏方法」(94%)、「3. 子どもが歌うための援助方法」(93%)、「7. 教師自身の発声方法」(91%)、「6.

回答項目

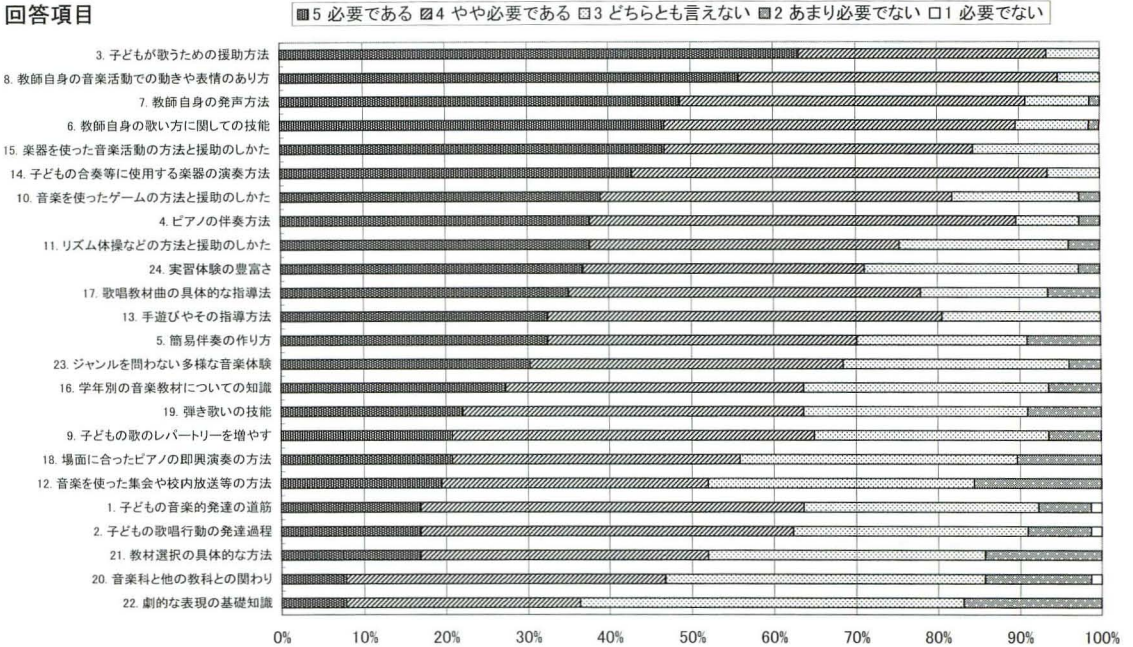


図4 質問項目③の回答（小学校）

教師自身の歌い方の技能」(90%)、「4. ピアノの伴奏法」(90%)であった。一方、「必要でない」「あまり必要でない」としたものが多かった項目は、「22. 劇的な表現の基礎知識」(17%)、次いで「12. 音楽を使った集会や校内放送等の方法」(16%)、「20. 音楽科と他の教科との関わり」(14%)、「21. 教材選択の具体的な方法」(14%)であった。

このように、小学校教師が養成の中での学習が必要と考えているものは、歌ったりピアノを弾いたりする際の教師自身の「音楽的技能」とともに、子どもへの指導の中で必要となる「知識」と多様な音楽的な遊びの指導方法であることが示された。一方、あまり必要ではないとしたものには、「劇」や「集会」といった各々の教師がそれぞれの現場で遭遇することで必要となってくるものがあげられた。また、学年別教材や他教科との関連などの知識は、必要とされない傾向が示された。

以上の結果から、幼稚園教師はピアノや歌の

技能、また教師自身の音楽面での表現力が必要と考え、就職の前に養成校等での育成を期待していると考えられる。また必要としないとした回答が多かったのが、子どもの発達に関する知識、教材についての知識や指導方法であることは、小学校では共通教材が設定されている状況と異なり、教材は各園やそれぞれの担任教師に委ねられている実情、また到達度への基準なども特に設けられていない状況のためではないかと考えられる。一方、小学校教師は歌ったりピアノを弾いたりする際の教師自身の「音楽的技能」や幅広い「知識」を主に必要とした回答が多く、楽器や歌の基礎的な演奏方法などを就職以前に養成校で育成することを期待していると考えられる。これは、小学校教師が「指導する立場」である意識が強いこと、子どもの表現を「援助する立場」の幼稚園教師の音楽のとらえ方と異なった視点であることを示す結果と考える。

なお、ここまで述べてきた質問紙②及び③の

項目については、用意した質問項目で構成される音楽的スキルや学習内容の構造を確認するため、幼稚園教師についてのデータの主成分分析を行った。その結果を表1及び表2に示した。表1の「幼稚園教師として現在必要と考えられる

音楽に関する技能・知識など」については、第1主成分「幅広い知識」、第2主成分「教師の援助や方法」、第3主成分「子どもの多様な活動に応じる力」と考えられた。また表2に示すように「幼稚園教師の養成の段階で身に付けてお

表1 「幼稚園教師が現在、必要な技能・能力と考えるもの」についての主成分分析結果

| 回答項目 | 1 | 2 | 3 |
|-------------------------|-------------|--------------|--------------|
| 2 子どもの歌唱行動の発達過程 | <u>0.68</u> | -0.26 | -0.06 |
| 16 年齢別の音楽教材についての知識 | <u>0.65</u> | -0.20 | -0.26 |
| 7 教師自身の発声方法 | <u>0.62</u> | -0.07 | 0.04 |
| 6 教師自身の歌い方に関する技能 | <u>0.62</u> | -0.10 | 0.18 |
| 1 子どもの音楽的発達の道筋 | <u>0.60</u> | -0.29 | -0.13 |
| 11 幼児体操などの方法と援助のしかた | <u>0.58</u> | 0.24 | 0.07 |
| 8 教師自身の音楽活動での動きや表情のあり方 | <u>0.57</u> | 0.06 | 0.23 |
| 22 劇的な表現の基礎知識 | <u>0.57</u> | -0.35 | 0.19 |
| 18 場面に合ったピアノの即興演奏の方法 | <u>0.51</u> | 0.25 | 0.31 |
| 9 子どもの歌のレパートリーを増やす | <u>0.48</u> | 0.03 | -0.06 |
| 23 ジャンルを問わない多様な音楽体験 | <u>0.47</u> | -0.31 | 0.29 |
| 3 子どもが歌うための援助方法 | <u>0.47</u> | -0.01 | <u>0.05</u> |
| 13 手遊びやその指導方法 | 0.31 | <u>0.47</u> | 0.28 |
| 4 ピアノの伴奏方法 | 0.34 | <u>0.44</u> | -0.14 |
| 10 音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた | 0.46 | <u>0.41</u> | 0.05 |
| 19 弾き歌いの技能 | 0.50 | <u>0.39</u> | 0.33 |
| 5 簡易伴奏の作り方 | 0.41 | <u>0.38</u> | 0.25 |
| 20 音楽表現と他領域との関わり | 0.61 | <u>-0.41</u> | 0.22 |
| 21 教材選択の具体的な方法 | 0.56 | <u>-0.44</u> | <u>-0.11</u> |
| 24 実習体験の豊富さ | 0.47 | -0.13 | <u>0.42</u> |
| 12 音楽を使う登園、下園、食事等の援助方法 | 0.54 | 0.17 | <u>-0.35</u> |
| 15 楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた | 0.64 | 0.28 | <u>-0.38</u> |
| 17 歌唱教材曲の具体的な指導法 | 0.64 | -0.18 | <u>-0.43</u> |
| 14 子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法 | 0.57 | 0.32 | <u>-0.52</u> |

表2 「幼稚園教師が養成において必要な技能・能力と考えるもの」についての主成分分析結果

| 回答項目 | 1 | 2 | 3 |
|-------------------------|-------------|--------------|--------------|
| 21 教材選択の具体的な方法 | <u>0.72</u> | -0.19 | -0.12 |
| 22 劇的な表現の基礎知識 | <u>0.70</u> | -0.11 | 0.08 |
| 11 幼児体操などの方法と援助のしかた | <u>0.68</u> | 0.15 | 0.16 |
| 18 場面に合ったピアノの即興演奏の方法 | <u>0.67</u> | 0.30 | -0.07 |
| 17 歌唱教材曲の具体的な指導法 | <u>0.66</u> | 0.02 | -0.34 |
| 7 教師自身の発声方法 | <u>0.64</u> | -0.25 | 0.30 |
| 6 教師自身の歌い方に関する技能 | <u>0.62</u> | -0.03 | 0.26 |
| 19 弾き歌いの技能 | <u>0.60</u> | 0.31 | 0.11 |
| 10 音楽を使ったゲームの方法と援助のしかた | <u>0.60</u> | 0.20 | 0.21 |
| 5 簡易伴奏の作り方 | <u>0.56</u> | 0.20 | 0.16 |
| 12 音楽を使う登園、下園、食事等の援助方法 | <u>0.54</u> | -0.33 | 0.09 |
| 3 子どもが歌うための援助方法 | <u>0.54</u> | -0.17 | 0.20 |
| 9 子どもの歌のレパートリーを増やす | <u>0.45</u> | 0.15 | -0.28 |
| 13 手遊びやその指導方法 | <u>0.42</u> | 0.28 | 0.12 |
| 4 ピアノの伴奏方法 | 0.59 | <u>0.49</u> | 0.02 |
| 24 実習体験の豊富さ | 0.39 | <u>0.46</u> | 0.02 |
| 20 音楽表現と他領域との関わり | 0.65 | <u>-0.38</u> | 0.20 |
| 2 子どもの歌唱行動の発達過程 | 0.58 | <u>-0.55</u> | -0.22 |
| 1 子どもの音楽的発達の道筋 | 0.56 | <u>-0.59</u> | -0.27 |
| 15 楽器を使った音楽活動の方法と援助のしかた | 0.66 | 0.17 | <u>-0.37</u> |
| 16 年齢別の音楽教材についての知識 | 0.61 | -0.13 | <u>-0.41</u> |
| 14 子どもの合奏等に使用する楽器の演奏方法 | 0.57 | 0.30 | <u>-0.53</u> |
| 8 教師自身の音楽活動での動きや表情のあり方 | 0.51 | -0.04 | <u>0.41</u> |
| 23 ジャンルを問わない多様な音楽体験 | 0.42 | 0.00 | <u>0.45</u> |

くべき音楽に関する技能・知識など」については、第1主成分「幅広い知識」、第2主成分「教師自身の音楽的技能」、第3主成分「教師自身の音楽的経験」と読みとることができた。両質問項目の傾向にはほとんど差がなかったものの、養成においては教師自身の音楽的資質の形成が必要とされることが示唆された。なお、主成分の負荷量をみると第1主成分が7.1と突出しており、一つの大きな成分でこの質問項目が成り立っていること、第2及び第3成分はその下位構造であることが示唆された。

<子どもの音楽的な表現活動について問題とされること>

質問項目⑤では子どもの音楽的表現活動について問題と思われることを、4つの選択肢から複数回答で選んでもらった。幼稚園教師の結果は図5の通りである。回答が多かった項目は、「行事に向けての音楽の練習」(60%)、次いで「教材曲の選択のしかた」(56%)、さらに「メロディーがうまく歌えない子どもへの指導方法」(49%)、「鼓笛隊や合奏の指導について」(37%)であった。また、「その他」(20%)に

は「どなり声で歌ってしまう子に対する指導方法」や「子どもの発声のしかたの指導方法」、「上手に歌えない子どもへの指導方法」や「リズムがとれない子どもへの指導法」などの具体的な記述がみられた。

一方、小学校の教師の結果を見ると、図6に示すように最も回答が多かったものは、「メロディーがうまく歌えない子どもへの指導方法」(82%)で、次いで「行事に向けての音楽の練習」(66%)、「教材曲の選択の仕方」(53%)、「鼓笛隊や合奏の指導について」(36%)であった。「その他」(36%)には、「発声の指導法」や「リコーダーや鍵盤ハーモニカ、和楽器など、色々な楽器の演奏指導」、「リズムをうまくとれない子どもへの指導法」、また「身体表現の指導法」や「音楽に関心を示さない子どもへの対応」など、多様な問題が記述された。

これらの結果を幼稚園と小学校教師で比べてみると、まず、「メロディーがうまく歌えない子どもへの指導方法」について幼稚園教師では49%が問題としたのに対して、小学校教師では82%と多くの教師が問題としてあげる結果と

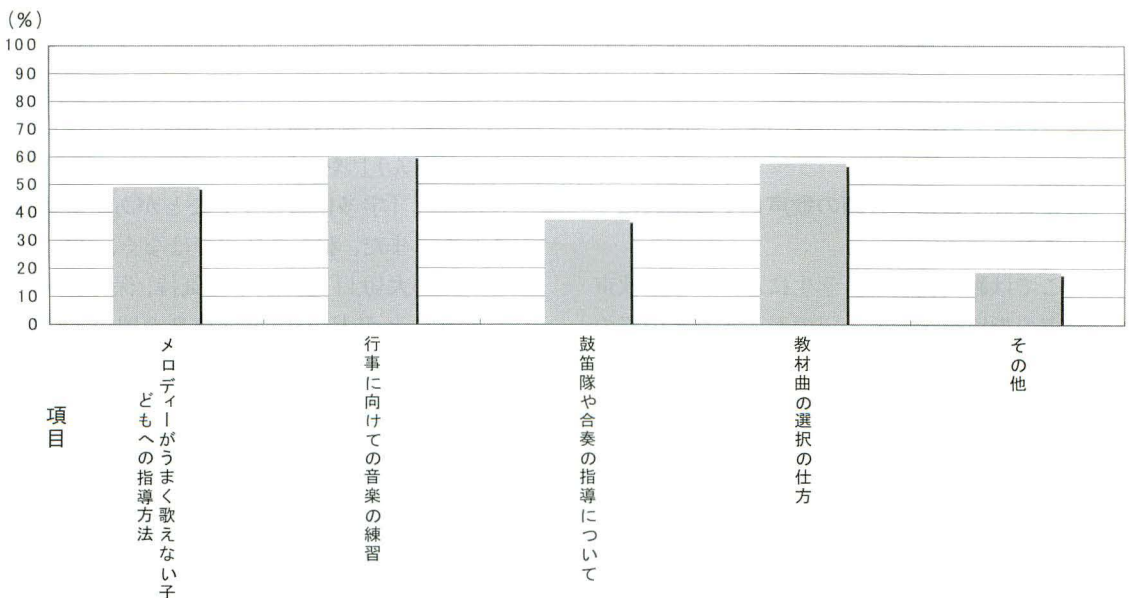


図5 質問項目⑤の「問題と感ずること」について〈幼稚園〉

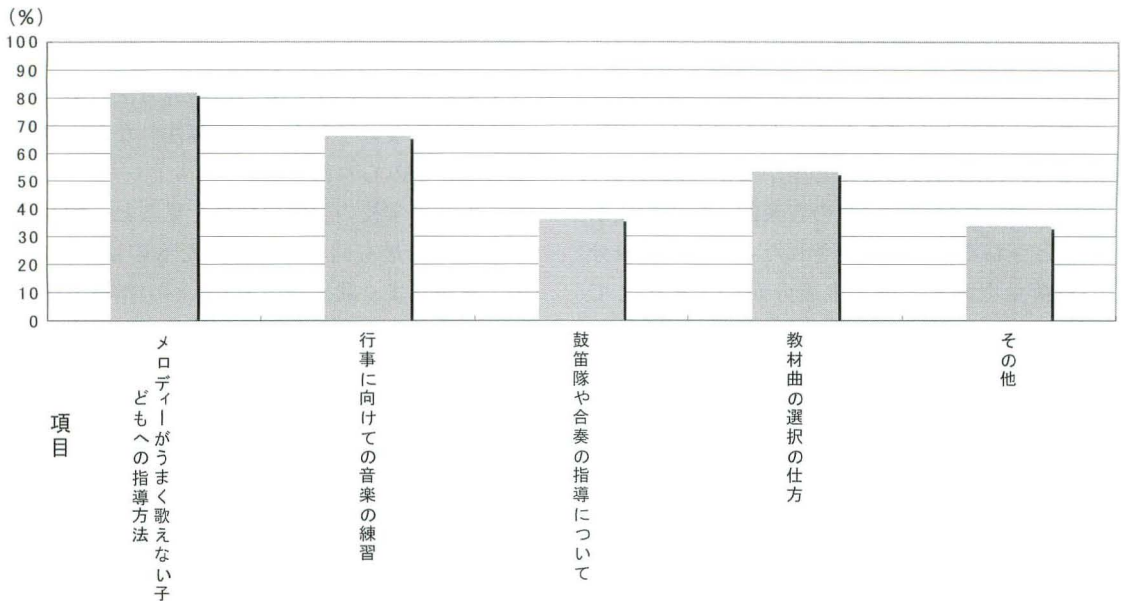


図6 質問項目⑤の「問題と感ずること」について〈幼稚園〉

なった。このことは幼稚園と小学校共に、子どもの歌うことやその発声指導に問題を感じており、特に小学校教師の方がより強くその困難さを感じていることが伺えた。また小学校教師は、幼稚園教師に比べ、その他の自由記述に具体的な音楽指導の困難さを多く記入しており、多岐に亘った問題を抱えている可能性が示唆された。なお幼稚園の教師では、自由記述からも音楽発表会へ向けての練習や鼓笛隊の練習への疑問や葛藤などが読み取れた。

<教員養成で目指す教師の歌声とその指導について>

ここでは教員養成で、学生にどのような歌声や発声の指導をするとよいのか、またその際のモデルとなるものはどのようなものかを明らかにしようとした。そこで、選択肢として実際の「歌手」の名前をあげ、回答者にイメージを持ちやすくした回答項目を作成した。具体的には実際の「歌手」の中から望ましいと思う歌手名を、3つまで選んでもらい、さらにその他として自由記述欄を設けた。

まず、幼稚園教師についてみると、「茂森あゆ

み」(57%) がもっとも高く、次いで「童謡歌手」(43%)、「吉田美和」(29%)、「森山良子」(29%)、「平原綾香」(16%)であった。また、「オペラ歌手」(6%)、「民謡歌手」(3%)、「倉木麻衣」(2%)、「演歌歌手」(2%)となり、「松田聖子」、「浜崎あゆみ」は回答が全くなかった。その他の欄には13名の回答者から記入があり、その内訳は「歌のお姉さん、お兄さん(個人名では、神崎ゆうこ、岡崎裕美、けんたろうお兄さん)」や、「夏川りみ」、「ゆず」、「美空ひばり」、「宇多田ヒカル」などがあがる結果となった。また、歌手の名前ではなく、「保育者の生の声が大切」「発声よりも気持、保育者が楽しく歌うことが大切」「自分自身が聞いていて心地よい歌声」などの記述もあった。なお、幼稚園教師の無回答は19%であった。

小学校教師では、「茂森あゆみ」(68%)がもっとも高く、次いで「森山良子」(48%)、「童謡歌手」(43%)、「吉田美和」(34%)、「平原綾香」(26%)と続き、「松田聖子」(12%)、「オペラ歌手」(8%)、「民謡歌手」(6%)、さらには「演歌歌手」(3%)、「倉木麻衣」(3%)とい

う結果となった。一方、「浜崎あゆみ」は回答がなかった。また、その他の欄には8名が記入し、その内訳は「夏川りみ」、「ゲド戦記のテルー役の声優」、「平井堅」、「サラ・ブライトマン」、「歌穂」があげられた。歌手の名前ではなく、「子どもの自然の声を生かせる発声」という記述が見られた。なお、小学校教師の無回答は1%と非常に少なかった。

これらの結果を比較すると、幼稚園教師と小学校教師ともに「茂森あゆみ」への支持がもっとも高いこと、また上位では5名、下位では6名の歌手名が共通する結果となった。両者ともに茂森あゆみをはじめ、テレビなどのメディアで子どもの歌を歌う「歌のお姉さん」への支持が高く、個人的な嗜好、また時代性も反映されていると考えられるが、上位5名の歌声や発声に共通するのは音域が比較的広いこと、「歌詞」などの発音がわかりやすいこと、話声と比べて歌声の音色に違和感が少ないこと、いわゆる表声から裏声へのチェンジ（換声）にむらが少ないこと、高音の伸びがよいことなどが、その理由として考えられた。回答が少なかった歌手については、個性的、或いは強い特殊な発声であること、歌詞などが明瞭でない傾向もみられ、教育の場にそぐわないと考える教師が多いことを示している。またこの質問に対する無回答の多少の傾向は、小学校教師が幼稚園教師より、歌声のモデルとしてこうした歌手に近い意識を持っている可能性を示唆するものである。

4. アンケート調査のまとめと今後の課題

<アンケートから得られたもの>

本稿では、教員養成における領域「表現」の音楽的側面について、子どもとともに育ち、音楽を自ら楽しむことができる保育者・教員を養成するためには、どのような授業が用意されていることが望まれるのかについて、また、養成における教育内容を明確化するため、幼稚園教師と小学校教師を対象としたアンケート調査を

中心に検討した。

対象とした幼稚園教師の殆どは、養成校等での授業経験以外の音楽学習経験を持っており、例えば「幼児期からピアノを習っていた」、「ブラスバンド部に所属していた」、「合唱団に参加している」等の回答が見られた。一方、小学校教師についてはピアノの学習経験や「ブラスバンド部に所属していた」、「ジャズバンドに入っている」等の回答が見られたものの、幼稚園教師ほど学習経験年数は高くなかった。

このような対象者間の差異はややみられたものの、直接子どもの音楽表現にかかわっている教師が直面し、必要としているものは「ピアノ等を使った演奏や援助の方法」と、「子どもと歌って遊ぶ方法」など、教師自身に内在する音楽的指導力を基盤にとらえていることが示唆される。これは自由記述からも伺え、ピアノに関する技能と歌うことについての関心が高く、これらの問題についての具体的な解決方法が求められていることがわかった。一方、子どもの発達に関する知識、教材についての知識や指導方法を必要とする回答が、幼稚園教師では下位となったことは、小学校のように共通教材がないこと、また各年齢における基準が設定されておらず、各園やそれぞれの担任教師に委ねられていることと関わりがあるのではないかと考える。

また、今回のアンケートの自由記述から、「指導」することへの躊躇を示すものとして「元気に怒鳴るような声で歌う子どもが多いので、きれいな声で歌わせるのが難しい」という内容や、「3歳児が歌う簡単な曲でも、きれいな声で歌うと聴く人の心を打つ素敵な曲になることに気付いた」等の、活動そのものについての視点の持ち方の重要性を示す記述が見られた。

しかし、実際の幼児・児童が持つ音楽的能力、とりわけ「音声」や「楽音」に関する聴取能力については未だ十分に明らかになっていないものも多い。例えば、幼児の音楽的能力の発達の諸相に関しては、どの年齢で、どのような発達段階を経て様々な能力が獲得されるかは、未解

明な部分が多いといえよう。特に音の高さや大きさといった音楽的な知識・概念については、幼児・児童に対して言葉を用いて説明したり、判断させたりすることの困難さが明らかになっており、さらにはそのような能力がどのようにして獲得されるかというプロセス自体も未だわかっていない(山根、2005)。したがって、今日の実際の教育場面では、保育者や教師が持つ発達についての知識や、いわゆる子ども観に依存した教育方法に委ねられているという現状がある。

領域「表現」の内容に照らし合わせてみると、そのねらいなどには「楽しむ」という文言が多用され、このことが幼稚園現場での音楽に対する教師の戸惑いを生じさせている可能性がある。例えば「ねらい」を楽しく歌うとしている場合、子どもがはしゃいで大きな声で怒鳴って歌詞を叫んでいても、「楽しく」歌っている様子から教師は「よし」としてしまう事が多い。実際にそれがどのような混乱したものであっても、「音楽」そのものが持つ質や音楽的表現の質を評価の対象とすることはないのであるが現状であろう。

子どもの音楽活動の内容に、より質の高さを求めることは、「楽しむ」という文言に逆らうこととみなされ、一定の価値観を持った指導と受け止められることが多いのが現状である。こうした子どもの表現についての指導をさけていこうとする傾向を改善していくには、養成にあたる機関に所属する教員等が互いに実践している教育課程やその内容について公開しあい、より子どもの音楽活動を視座にした、また、子どもの実践を背景とした教育ができるようにするシステムを作ること(志村、2006)が、喫緊の課題であると考えられる。

<教師の「声」を育てる意識の必要性>

ところで、今回の調査により、子どもの表現を支える教師の「声」に対する問題意識が高いこと、ピアノの技能について必要と考えられていることが明らかになった。小学校学習指導要領において、「頭声的発声」の文言が「自然で無

理のない声」に変わり、改正を肯定的にとらえている教師が多いものの、どのように「自然で無理のない発声」(奥村、2003)を育ててよいか戸惑っている現状は従来から指摘されてきた。項目7の「どんな発声、歌声を指導するとよいか」という質問に対して茂森あゆみをはじめ、「歌のお姉さん」への支持が高かった。「歌のお姉さんの歌声」が学校放送教育番組で長年にわたって放送されたことによる学校音楽教育に与えた影響の多大さと同時に、「歌のお姉さんの歌声」が歌の「お手本」であるという固定観念が持たれていることは、現在の学校音楽教育が抱える問題を示唆しているとの指摘もある(檜下、2006)。幼稚園教師も小学校教師も、子どもの声をどのように援助、指導してよいかわからないで迷っているのが現状であるといえよう。子どもの声の指導に困難を覚えるのは、自分自身が教わっていないから、または学びたい、真似したいと思えるモデル(教師)に出会えなかったからではないだろうか。幼稚園教師の自由記述に、「発声よりも気持、保育者が楽しく歌うことが大切」、「自分自身が聞いていてこちよいか歌声」というものがあつたことから明らかである。

加藤(2005)は、「歌を歌いたいという、人なら誰でも持っていると思われる基本的な願い」が、優れた指導者によって学習者の苦手意識が克服され、「ごく自然に歌えるようになった。」ことを報告している。教師となり現場で楽しく歌うことができるために、また、こちよく聞ける声の育成のために、われわれ養成する者は「声」の指導に責任を持たなくてはならないだろう。養成校で「歌」を教える教師の大半は、いわゆるクラシック音楽を学び、コンサートホールなどでの演奏を前提に訓練した人々である。イタリアオペラやドイツリートなどに代表される外国語の歌ではなく、日本の歌曲を専門とする者であったとしても同じことである。その意味で、明治以来の異文化摂取の葛藤の跡(安田、2006)として、日本人の歌唱が抱える

問題の只中に養成校の教師は置かれていると考える。

ここで強調したいことは、保育室や教室で子どもに歌いかける声、子どもとともに歌う声が養成校で指導されなければならないということである。幅広い表現に対応できる合理的な発声方法として、また音声障害をおこしにくい無理のない発声方法として、西洋クラシックの発声法をベースとすることに異論はないだろう。しかし、頃安（2006）が「いくらイタリア歌曲やオペラのアリアを歌えたとしても、そのことが子どもの発達に応じた歌唱指導には必ずしも結びつかない」と指摘するように、子どもの歌が場違いなクラシックの発声で歌われたり、或いは全く話し声のまま力で込め頑張って張り上げる声で歌ったりしないことが望まれるのである。言い換えれば、保育の場では「あめふりくまのこ」や「不思議なポケット」が、また、教室のなかで「茶摘み」や「おぼろ月夜」が、子どもの声に寄り添い、かつ明瞭な歌詞と正しい音程で再現されることが必須と言えよう。

今回のアンケートでは、小学校教師は「歌声」についての具体的なイメージをもつことがわかったが、一方、幼稚園教師は無回答のものが多く「歌声」のイメージが明確でない可能性が示された。しかし、アンケートで提示された既成の歌手の歌声がモデルになり得ないことを示す結果と考えることもできる。そこで、学生には入学後の早い時期から子どもを実際に観察し、子どもと遊ぶ機会を持たせて、まず現実の子どもの姿を知ることと、さらには実際の教師の歌声にふれる体験を用意することが、まず必要と考える。実際の保育室で子どもと音楽で遊び、歌声でかかわるにはどのような声をモデルとするかを選択する力は、そうした実践においてこそ育まれると考える。

これにかかわって、これまで筆者らは、学生自身が自分の声を知ること、自らの声が育てられることを経験して初めて子どもの声への理解や指導が可能になると考え、保育内容「表現」

などの授業においても「歌うこと」を具体的に指導してきた（奥村、2005、奥村・志村、2006）。もちろん歌うことに自信のない学生、人前で歌うことを躊躇する学生は少なからずいることは事実である。しかし楽器の演奏のように、ひとに教えてもらわなくても、楽譜が読めなくても、誰でも幼いころから自然に歌っていた経験を持っている。声は鍵盤楽器などと違って、目に見える操作で楽譜に示された音の高さが再現できるというものではない。自分自身の身体ではあっても、見ることのできない部分、触ることのできない「声帯」や「呼吸器」をコントロールして歌っているのである。

そこで、「歌う」以前に、「歌うこと」がskillであると理解させることが重要と考える。テキストを読んだり、台詞をしゃべったりというような指導を行い、学生同士で同じ言葉や台詞を、各々がニュアンスを変えて発話してみるという体験をさせることで、学生にさまざまな声の違いに気づきを与えてきた。特に、話す声にも色々な音色があることや、自分が普通に話している時の声の高さはどの辺りかを知ること、地声でどれ位の高さまでしゃべることができるか、またそのままの発声で歌えるのかなどを実践することで、確実に学生の声に対する意識は変容する。また小学校の音楽の教科書等に乗っている、「アイウエオの口の形の写真」のように母音を発声すれば、全く不自然な日本語の歌になってしまうことも理解できるようになる。実際に、学生が楽な発声から次第に高い声を出していく中で、地声（表声）から頭声（裏声）にチェンジする換声点近辺の発声の不安定さを味わうことで、学生は自分自身の声とじっくり向き合う態度を形成することができる。そうすることで、自分が子どもに伝えたい音楽を「歌うこと」を通して実現しようとしたとき、地声や頭声もつ多様な「声の力」に気づき、声そのものが伝えるメッセージの重要性に気付くことができるのである。

5. おわりに

学生を養成する音楽教師は「音楽の専門家」であるだけでは不十分である。子どもとともに歌うことを楽しみ、子どもの音楽的な育ちを援助できる教師を育てようとするのであれば、自ら子どもの歌声に耳をすませ、ともに歌い、子どもとの遊びの中で色々な音や声に気付くような体験を実際に経験する必要があるだろう。また音楽が宿命としてもっている「練習することが更に音楽の楽しみを増進させる」ことを、子どもと共に活動する中で、より「質」の高い楽しみをめざすためには、そこに到達させるためのストラテジーを構築することが必要になってくるだろう。こうしたことが、学生を養成する上で最も重要な課題となってくる。

今後は、実際に現在保育者及び教員養成に在籍している学生が教育実習の場に出て、子どもと直接音楽を共有する経験をしたとき、どのような音楽的な問題に直面したか、またそれらを乗り越える手立てをどのように用意したのかなどを調査し、養成の場で「表現」や「音楽」実技などの教育内容をどのように充実させていくかの作業も必要とされるだろう。さらに、実習経験が領域「表現」の音楽側面についての意識をどのように変容させたかについても明らかにし、子どもの音楽活動を視座にした実践を背景とした、よりよい養成のシステムを構築するため、さらに養成において必要とされる音楽的専門性を明確にしていく。

註1)：②では図1に示したように、幼稚園の教師には園生活に即した質問項目を作成し、小学校の教師には学校生活に合った内容の項目を使用した。

註2)：③では図2に示したように、幼稚園の教師には園生活に即した質問項目を作成し、小学校の教師には学校生活に合った内容の項目を使用した。

文献

- 井戸和秀：「幼児とともに育つ—幼児の音楽的発達を求めて—」、日本保育学会第56回大会発表論文集、pp.S22-S23、2003年。
- 樫下達也：「学校放送史における音楽教育番組の変遷の考察」、和歌山大学大学院教育学研究科修士論文、2006年。
- 加藤富美子：「明瞭で聴き取りやすい日本語で歌うために—大石哲史の指導から得たもの—」、東京学芸大学紀要、芸術・スポーツ科学系第57集、pp.23-32、2005年。
- 頃安利秀：「教員養成教育における教科専門科目のあり方を考える—教科専門科目「声楽」についての試案—」、教科教育学研究第24集、日本教育大学協会第二常置委員会編、2006年。
- 小川博久、林信二郎：「保育者論」、樹村房、2002年。
- 奥村正子：「保育者養成における「声」の指導—「表現」の授業実践を通して—」、音楽教育研究ジャーナル第23号、東京芸術大学音楽教育研究室、pp.16-26、2005年。
- 奥村正子、志村洋子：「保育者の音楽的表現のとらえかた(3)—保育の中で求められる音楽的「知性」の具体的な要素—」、日本保育学会第59回大会発表論文集、pp.868-869、2006年。
- 奥村俊子：「自然で無理のない声って?」、教育音楽小学版12月号、pp.47-52、2003年。
- 志村洋子：「保育者養成において学生に「表現」をどのように指導するか(2)—学生の「歌唱」指導についての共通理解を求めて—」、日本保育学会第59回大会発表論文集、pp.S52-S53、2006年。
- 山根直人：「幼児期における楽音の音高識別に関する実験的研究」、日本発達心理学会第17回大会発表論文集、p.347、2006年。
- 安田寛：「洋楽導入期から現在に至る異文化適応の歴史的体系的研究—日本人の身体と音感の変遷—」、平成15-17年度科学研究費助成補助金研究成果報告書(研究代表者 嶋田由美)、p.9、2006年。

謝辞

本研究の実施にあたり、お忙しい中アンケートにご協力頂きました幼稚園の先生方、小学校の先生方に心より感謝いたします。